

やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

法隆寺のカラブロは、蒸気が床下からではなく、浴室上部の壁穴から直接吹き出す仕組みだった。焚かなくなっていた。1年ほどだったので、関係者の志村哲夫さん(当時50歳)などから、入浴の方法を聞くことができた。

浴室は男女2室に分かれて、それぞれ6人ずつが入れるようになっていた。蒸気は大釜から鉄のパイプを通して直接にそれぞれの部屋の中に入り、湯気となって上の方に溜まっていく。入る人は、頭に手拭いを被って丸裸で、内部の壁の方を向いて腰掛けのような柵にうすくまって座る。あ

ごを引いて、尻を落とし、柵に覆い被さるようにならないと「尻が高い」と怒られる。

そのままでは湯気が満遍なく行き渡らないので、上に溜まっている湯気を、濡れた手拭いで下に振り向ける必要がある。これが十分でないとい

「もっと熱いユウ(湯)をくれ!」と言われる。湯気を配る人は「音頭取り」と呼ばれ、入る人の中から風呂に慣れている人がする。この音頭取りは首をすくめて、湯気が頭にかからないようにし

ないといけない。湯気の中を頭を伸ばして火傷をした人もいたという。なかなか危険な蒸し風呂な

「立ったらあかんで」と注意される。熱い蒸気が充満する内



法隆寺のカラブロ入浴想像図
＝勺禰子さん画

部で、音頭取りは「フッフッフッフッフッフ」と調子をつけて息をしながら、湯気をまわす。湯を十分に焚いて熱い時には、手拭いを宙でクルクル回すだけで湯気が人にまわる。湯気が足りない時には、上から下へ配るようにしなければならぬ。中は暗いので、手探りで確かめながら、手拭いで入っている人の背中をポンポン叩くようにする。手拭いのしぶきが気持ちよいのだという。手拭いは、そのまま振り回すと長いので、

対角線の端を掴まんで二つ折りにするとちょうど扱いやすい。普通15分くらいで一旦外へ出て、洗い場水をかぶる。これを3回くらい繰り返す。もっと繰り返す人もいる。

「寒いぞう!」「もっときつく燃やして!」と中の人は声を掛け、釜場の人や音頭取りは微妙な調整役を務める。朝7時から焚き始め、10時から入り、16時に焚き終わる。弁当を持ってやってくる人もある。熱のある人も入れれば治る。あの風呂に行く人はみんな長生きすると言われている。

湯気まわす「音頭取り」

(奈良民俗文化研究所代表)

次回16日